

## 医学生の緩和ケア教育のための授業実践大会 終了後アンケート(一般参加用)結果

参加人数 15

### 1. 職種(複数回答)

医師	5	33.3%	
看護師	5	33.3%	
薬剤師	3	20.0%	
教員	4	26.7%	
その他	1	6.7%	歯科医師

### 2. 医学生に対する緩和ケアの授業経験

経験なし	9	60.0%
1~2回	1	6.7%
3~4回	0	0.0%
5回以上	5	33.3%

### 3. 参加動機(複数回答)

医学教育に興味がある	9	60.0%
他大学の授業に興味がある	8	53.3%
講演内容に興味がある	7	46.7%
これまでも参加していたため継続して学びたい	7	46.7%
授業はすでにしているが悩んでいる	6	40.0%
「大学病院の緩和ケアを考える会」に参加したい	6	40.0%
人脈づくりのため	3	20.0%
これから授業をしなければならないため	2	13.3%
その他	0	0.0%

### 4. 自分自身の授業における課題(複数回答)

印象に残る授業方法	10	66.7%
興味、関心を引く授業	10	66.7%
実践につながる授業	7	46.7%
実感できる理解を促す方法	6	40.0%
講義形式以外の方略(ロールプレイやPBLなど)	4	26.7%
資料の作り方	4	26.7%
授業内容の選択	3	20.0%
学生の意欲に問題がある	3	20.0%
全ての学生に同じ理解を促す方法	2	13.3%
授業経験がない	1	6.7%
授業準備の方法	1	6.7%
学生が理解できない	1	6.7%
授業時間が足りない	0	0.0%
その他	1	6.7%

#### その他の意見

現在の環境で緩和ケアの授業を実施することがまず課題です。

### 5. これからの医師に必要な緩和ケア教育について考えたこと

- ・決して特別ではないこと、1人で行うことではないこと(チームワーク、協働)がかえこまないでよい、ことが考えられればその上に知識がのってくるように思えます。
- ・決して特別ではないこと、1人で行うことではないこと(チームワーク、協働)がかえこまないでよい、ことが考えられればその上に知識がのってくるように思えます。
- ・医学科の状況も最初に講義され、多職種連携の教育についてもワークを通して実際に体験できて、さらに学びたいと感じた。また、意思に任された仕事の重さというのをあらためて感じる部分があった。
- ・卒前について考えると、これまで死について考える機会があまりなかった学生さんも多いとのことなので、授業後のアフターフォローや授業中の配慮を整えてから実施することが必要かと考えました。
- ・みとりにたずさわる可能性のある科にすすむ場合のセルフケアについての基礎知識が必要と考えました。
- ・死について理解させる機会が必要。経験。本日の内容。
- ・死の過程を知ることは大切だと思いました。

・生育環境、教育内容(義務教育)が異なる今の世代に対し、経験も含めてどのように教育を行うか考えていく必要がある。動画、VR等、活用できるツールが増えており、シュミレーション機器もあるため、実践に活かせる教育が可能である。

・治らない患者、治せない患者を前にどうあるかという視点が大事ではないかと感じた。

・多職種連携の基礎、実践をぜひ学部教育を組み入れて頂きたいと思います。

・緩和ケアに興味を示さない医師への教育方略

・多職種連携

・同グループの学生さんに伺ったところによると、講義や演習、動物・献体慰霊祭・鎮魂式など、学生時代に死(生観)について考える機会(イベント)もないわけではないことがわかりました。しかしながら、その印象が記憶は浅く、また身近な存在の死を経験することがないままに現場に出ることがほとんど、“看取りの作法”等については、OJTのような形で学ぶケースが多いのが実情であることも学びました。一般的に(患者さんの)“死”からは遠いところにあるイメージのある薬学部生・薬剤師であるが、在宅業務等への関わりが求められる中であって、今後必要な教育のあり方について考える良い機会となりました。

## 6. 自身の死生観

・仕事柄、緩和のケアはライフワークであり、常に自然に考えているように思います。

・むずかしい

・自分の経験や年齢でだいぶ変わってきたように思うが、まだまだ十分に考えずに逃げている部分があるかなと実感した。

・ある程度確立しつつ、常に問い続けるものと考えました。

・逃げない、向き合う、がなぜ入っているのかについて自分も考えてみなければと思いました。

・あまり考えたことはない。患者のことが中心。医学は死後の世界を教えてくれないが、宗教は教えてくれるので心の支えになる。

・医療の教育を受ける前から知人、ペットの死を通して生命を考えるチャンスがあり、今の自分につながっている。学生時代にも終末期患者を受け持ったり、術中死した患者を見た経験から「人は死ぬ」事と「いつ死ぬかわからない」事を学んだ。人の死を通して自分の家族の死を意識し、家族間で話すようになった事が医療の現場での対応に役立っていると思う。

・生命、およびその人の人生(ナラティブ)を尊重することが死を受け入れる基本だと思う。

・人、それぞれ

・人(他者)の手助けを受け入れて死んでいきたい。できるだけ苦痛なく最後を迎えたい。

・身内を亡くして間がない中での受講となっていたのですが、様々な視点から“死(生観)”を捉え、知識を得られたことで、少しだけ前向きな受容が進んだ気がしています。死生観は人の数だけ存在するだろうし、経験や環境、様々な要因で大きく変化しうるものであることも自ら身をもって学んでいるところです。

## 7. 医学生の死生学教育のための授業検討の感想と意見

・自身が教育するという立場にありませんが、このような場でディスカッションする事での意味は見いだせたように思います。

・具体的な授業設計とシナリオ作りが大変勉強になった。各グループの発表もそれぞれの視点が違って興味深く感じた。今後に生かせればと思う。ワークが様々な職種、学生もまじえていて目線の違いがありよかった。

・手をかえ品をかえ、学生さんの死生観教養を目的の授業、取り組みを行っているのですが、学生さんがそれらを死について考えるためのものだとして認識されていないと知れたことがインパクトが大きかったです。伝え方を検討しなければと思いました。

・様々な方の意見、とくに学生さんの意見がきけてよかったです。

・学生の意見を聞いたので考えやすいが、教育はまた別なので難しい面がいろいろあることがわかった。

・学生が看取りのイメージを持つことが難しいと感じています。

・考えるチャンスを与えたいが、ショックをうける、自信をなくす、恐怖を感じるリスクも考えてフォローできる体制をつくっておく事が必要と気づいた。教育がとても変化しており、多職種での対応も当たり前になっている事をうれしく感じた。学生自身が目標、意図を意識せず、知識をつめこんでいる状況があり、教える側の意図がわかるような講義が必要と思った。

・基礎系の教員も議論に加わると、将来の教育の幅が広がるのではないのでしょうか。

・日々悩んでいます。

・学生の意見をききながら、実際に学生がこの内容で分かるか確認して、授業検討できたのがよかったです。

・『…患者やその家族に寄り添い、患者の死から逃げずに向き合うことができるようになること』を目的に、まずは死を知るための「心揺さぶられる体験」を提供しようというところから授業構成を検討しました。グループ内で挙げられた案や実施例は参考となるものばかりで非常に勉強になりました。患者の死に向き合う経験が辛すぎるものになってしまうことを避けるための体制づくりも必要ではないかという視点が持てたこと、緩和領域ではDNAR＝良いことと考えられがちであるが、患者家族にとっては必ずしもそうではない場合もあり、患者やその家族の価値観をどれだけ引き出せるかが重要であることを再認識する機会ともなり、非常に貴重な体験となりました。

#### 8. 講演「看取りの作法をどう伝えるか」の感想

- ・看取りの場面に立ち会うことの少ない医師達への看取りの作法を行っていることについて複雑な思いでした。医師であれば、同じように対応できないものかなと率直な感想です。
- ・内容が少しずつ具体的な対応につながっていきわかりやすかった、応用もしやすく感じた。
- ・具体的で貴重なお話をありがとうございました。
- ・実際にどのように教えていらっしゃるのか知れてよかったです。かなりレベルの高い、とも一方で感じました。
- ・知識の確認ができた。答えのない世界だが、コミュニケーションが重要。
- ・大変わかりやすく、具体的で勉強になりました。
- ・行動レベルまで説明があり、この説明を受けた医師の看取りは変化すると思った。多職種にも看取りについて学べる内容で参考にしたい。
- ・レジデントを看取りの場に同席させ、次に立ち合い、最後に一人だと、段階をおって経験できるのは、とても素晴らしいと思いました。
- ・大変参考になりました。看取りがプロセスのひとつであることや、それに関わる医師のメンタリティなども良く理解できました。複雑性悲嘆についてはもう少し詳しく聴きたいと思いました。
- ・たいへんためになりました。
- ・非常に分かりやすい内容でした。医師だけでなく他職種(Ns、MSW、リハビリetc)が学んでほしい内容でした。
- ・医療従事者や教育者というよりは、患者遺族の立場としての拝聴となりました。そして非常に癒されました。医療従事者の寄り添い方で遺族もこんなにあたたかい気持ちになるんだ、と思うと、そういう寄り添い方について学生と共に学んでいく意欲が高まりました。ありがとうございました。

#### 9. 当会の企画への希望

- ・看取り期の学生実習ガイドライン、指針
- ・さらなる発展をおいのりします。
- ・ぜひ今度も参加させていただければ幸いです。毎回、きめ細やかにご準備いただいて大変感謝しております。
- ・非常に勉強になりました。ありがとうございました。
- ・特にありませんが、緩和ケアに興味のない医師が多く、特に死についてはメジャーとは言えないのもっとメジャーになることを期待します。
- ・学生、多職種でミーティングでき大変よかったです。ありがとうございました。